朝日 俳壇 歌壇

馬場あき子選

クロッカスの群れ咲く庭を黒猫が花粉飛ばしつつ歩いて行けり　（ドイツ）ハルツォーク洋子

やあコゲラみどり減りゆくこの町に再会できたり背のシマの白　（習志野市）太宰　明子

大内宿の茅葺屋根に湯気たちて雪解しずくの音やまぬ春　（仙台市）沼沢　修

☆雪降れば歓声あげて踊り出すヘルパーさんはフィリピンの人　（京都市）中井冨士子

お前らも思へば遠くへ来たもんだノルウェーの鯖モーリタニアの蛸　（松山市）宇和上　正

☆萌え近き高尾の山は静まりて緑啄木鳥のドラムときにこだます　（東京都）上田　国博

「おかあさん」と教えたはずがいつの間に「ママ」と呼ばれてそれもしあわせ　（大館市）柴田　陽子

山火事の迫り来るなか父親は入学の子のランドセル持つ　（釜石市）若井　芳

古き家の寡のための椀の数行く先定まる子供食堂　（矢板市）山田久美子

絹豆腐漆に練り込み猫の毛を描く伝統の蒔絵師の技　（石川県）瀧上　裕幸

【評】第一首はクロッカスの群れ咲く庭に広さがみえ、花の花粉を体中につけた黒猫の堂々とした姿も春の陽気のおおらかさ。第二首の初句は楽しげな呼びかけ。コゲラは白黒の縞模様。まだ郊外の庭木にも来る。第四首、はじめての雪の感動。

佐佐木幸綱選

ビルの狭間切り取られた空間に丸き特急の鼻先が来る　（大分市）岡　義一

近頃のハンサムらしい細面前髪口紅色白にして　（茨木市）瀬川　幸子

☆雪降れば歓声あげて踊り出すヘルパーさんはフィリピンの人　（京都市）中井冨士子

メニューを睨み紙にコツコツ字を埋めるファミレスにいても受験生なり（東京都）井上　智景

鉢退かし蛙起こせばまだ眠くからだ丸める不機嫌そうに　（浜松市）松井　惠

窓ぎわの席より順に伝わりて「虹！」の手話が教室に広がる　（東京都）友部美奈子

暦で点字読む人室内に素早くタイプを打つ音響かす　（石川県）瀧上　裕幸

ああ言えばこう言う妻と四十年呆れはすれど飽きることなし　（新潟市）小幡　章

瓦礫踏み何処へゆくのかガザの子の後姿ばかりの映る　（郡山市）遠藤　雍子

奥能登の雪ふる珠洲の銭湯に苦難に生きる人の笑顔みつ　（鹿嶋市）大熊佳世子

【評】第一首、限定された視界に入って来た先頭車両を表現して独特。新幹線だろうと読んだ。第二首、近年のハンサム像をクローズアップしてみせる。口紅に注目。第三首、ほとんど雪を見たことがないヘルパーさんなのだろう。

高野公彦選

酒一合味わいにつつ飲む今宵肴の味付け妻には如かず　（大館市）小林　鐐悦

まず薫り色艶歯応えそして味いぶりがっこに五感悦ぶ　（相模原市）石井　裕乃

百歳の辞世歌ありぬ朝日歌壇「愉しかった」の言葉の眩し　（神奈川県）高橋　静一

忘るまじ「言葉を砥石にかけること」馬場先生の歌への思い　（太田市）川野　公子

☆馬場さんが初めて採ってくれた歌思ってバニラアイスをすくう　（奈良市）山添　葵

欧州のリメリックという五行詩に挑戦してすぐ短歌に戻る　（オランダ）宮沢　洋子

くれないの南天の実は雪かぶり遅き陽を浴みしずしず雫す　（千曲市）米澤　光人

☆萌え近き高尾の山は静まりて緑啄木鳥のドラムときにこだます　（東京都）上田　国博

図書館に陽がさして来てしずかなり受験シーズン終わりし日曜　（橋本市）秋月　晶江

新たなる感性で越後旅しをりイザベラ・バードの足跡辿り　（新潟市）寺尾　正人

【評】1首目、独酌を楽しみつつ妻の味付けの上手さを恋しく思う。2首目、イブリガッコのあまりの旨さに五感が歓喜する。3首目、2月16日の掲載作「露の世に百歳までも永らへて愉しかりけり露の世さよなら」（松村幸一）を羨望する歌。

永田和宏選

退院のあの日のように旅立った妻にささやく「家に帰ろう」　（館林市）阿部　芳夫

ヨーカドー去って蛇沼牛久沼女化神社残る我が町　（龍ケ崎市）岩井　廣安

カップ手にロボット通過を待ちておりファミレスの昼氷雨の街の　（高崎市）小出美恵子

「ネコちゃんが来た」と四歳はしゃぎおり配膳担当ネコ型ロボット　（福山市）倉田ひろみ

現実は油が無いのだガザを行く驢馬の車に詩情を追うな　（大和郡山市）四方　護

戦争が終はったら着るといふ背広ゼレンスキーに早く着せたい　（岩国市）木村　桂子

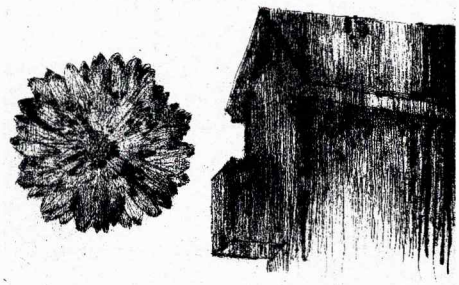
惑星と呼べない冥王星のよう肩書のないわたしの名刺　（札幌市）住吉和歌子

桜花あふるるやうに咲き出してゐくぼのやうな風の影見ゆ　（厚木市）北村　純一

友よりの手書きの手紙届きてぬるき酒飲むやうに読む夜　（岐阜市）後藤　進

☆馬場さんが初めて採ってくれた歌思ってバニラアイスをすくう　（奈良市）山添　葵

【評】阿部さん、二句切れ。退院の喜びとともに呼びかけた「家に帰ろう」が、今回は悲痛の極みの囁きとなった。岩井さん、近代的なスーパーが撤退して、残された古い地名がもぞもぞと動き出す。三、四首目、配膳ロボットはまだ目新しいか。



〈ガーベラと2階のベランダ〉　岩尾恵都子

俳句時評　文人俳句の自由さ

岸本　尚毅

「文人俳句」とは、小説家などの文人が余技で詠む俳句のこと。漱石、荷風、龍之介、犀星などが知られる。当代では川上弘美が二冊目の句集『王将の前で待ってて』（集英社）を刊行した。

求ム雪女郎初心可細面年不問

雪女に扮する人の募集か。酔狂な人が本物の雪女を募集していると解しても楽しい。「年不問」に可笑しみが漂う。

引込線ゆけば花野に終はりけり

引込線の線路を辿ると、秋の草花が咲く花野で途切れた。川上には、叔父の幽霊と花野で会う「花野」という短篇がある。花野に至る謎の引込線は、小説「花野」の世界を思わせる。

春しぐれ釈迦も芭蕉も腹くだし

これも異色作。仏陀も俳聖芭蕉も腹くだしで死んだ。春の時雨が情けない。

余技ゆえの余裕が文人俳句の魅力だといわれるが、川上の句は、その小説と同様の特異な発想が読者の意表を突く。

奇想に遊ぶといえば、大木あまりもそうだ。近刊の『山猫座』（ふらんす堂）にこんな句がある。

暖簾くぐるごとく柳の中へ入る

暖簾のような枝をくぐって柳に入る人影。「遊行柳」の柳の精だろうか。

大木には詩画集の著作もあり、その句には文人的な雰囲気が漂う。

猫の蚤畳へ飛んで柚子日和

柚子の熟れた秋の明るい日、座敷で猫の蚤を観察する。その浮世離れした趣は文人俳句にも通じるものだ。

「文人俳句」というと往年の文豪を連想するが、文人的な自由さは現代の作者の中に生き続けている。（俳人）

◆馬場あき子さんの選歌は今回で終わります。

風信

第25回現代俳句大賞　現代俳句協会主催。東京都の俳人・中村和弘さん（83）に決まった。人間探求派の流れを「陸」主宰として継承し、現代俳句を意識しながら骨格の強い文体を探求したことが受賞理由。2018年に同協会の会長に就任し、在任6年の間に赤字脱却や法人化を成し遂げたことも評価された。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（選に3作目まで）。QRコードから